

一億総活躍社会実現対話（大阪）  
議事要旨

（開催要領）

1. 開催日時：平成28年3月12日（土）13:40～15:10
2. 場 所：コングレコンベンションセンターホールC
3. 出席者：

加藤 勝信	一億総活躍担当大臣
米谷 理沙	大阪工業技術専門学校
藤井 優斗	関西大学
是松 礼子	ポリテクセンター関西
尾方 由香里	上新電機株式会社
貴志 ヒカル	株式会社高島屋
井口 裕美	パナソニック株式会社
笹岡 敏	住友生命保険相互会社
麻生 満美子	リリーアンドデイジー株式会社代表取締役
目良 賢治	相談支援事業所勤務
清水 徳熙	京都中央信用金庫
三角 あい	社会福祉法人つつみ会たんぽぽ学園
財前 唱子	大阪保健福祉専門学校
福井 幸枝	社会福祉法人こうほうえん介護老人福祉施設よなご幸朋苑

（議事次第）

1. 開会・アナウンス
2. 開催挨拶
3. 意見交換
4. 閉会

（概要）

○司会 皆さま、こんにちは。本日は「一億総活躍社会実現対話」にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。本日は加藤一億総活躍担当大臣にお越しいただいております。皆さまと共に「一億総活躍社会」の実現について対話を行ってまいりたいと存じます。私本日の司会を務めます永倉 由季と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、さっそく始めてまいります。ご出演の皆さま、ご登壇ください。皆さま大きな拍手でお迎えください。続きまして、加藤勝信一億総活躍担当大臣、どうぞご登壇ください。ご登壇の皆さま、ご着席ください。それでは、開催にあたり、加藤勝信一億総活躍担当大臣よりごあいさつをいただきます。加藤大臣、よろしくお願いいたします。

○加藤一億総活躍担当大臣 皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました一億総活躍担当大臣をしております加藤でございます。今日は「一億総活躍社会実現対話」、開催をさせていただきましたところ、多くの皆さま方に会場に足を運んでいただきました。また、今日は意見発表をしていただく皆さん方にも、こうして登壇をしていただきましてありがとうございます。また会場には、国会議員の先生方にもお出でをいただいております。ありがとうございます。

今日私ども、一億総活躍社会この実現に向けて、今、国民会議の場において、この春ニッポン一億総活躍プランを策定すべく今議論をしております。このプランに、それぞれ皆さま方の意見をより反映させていただきたいということで、この実現対話を、ここを含めて4カ所開催させていただきました。仙台、東京、福岡、そして今日この大阪がいわば最後の会場ということでございます。短い時間ではありますが、有意義な対話を是非させていただきたいと思っておりますので、皆さま方のご協力もよろしくをお願いをしたいと思います。対話を進める前に、今私どもが進めようとしております一億総活躍社会、これに向けて少しお話をさせていただきたいと思っております。

今、安倍内閣では一億総活躍社会に向けてということでもありますけれども、まさに若者、高齢者、女性も男性も障害のある方々も、国民一人一人が家庭で、地域で、そして職場で夢や希望を持ち、その持てる力を最大限に発揮いただき、生きがいを持てる社会、この一億総活躍社会の実現を目指そうとしているわけでありまして。

私共が政権につきまして、アベノミクスによって企業の利益は過去最高の水準になってきております。しかしながら、個人消費の改善、あるいは投資の拡大、これには遅れがあります。そしてやはり、その目の前にある少子高齢化という構造的な課題、これに直面をしているわけでありまして、これを乗り越えていかなければその先の未来を切り開いていくことは非常に難しいと思っております。人口が減少していく、働く方も減る、あるいは購買をする方、買い物をする方も減っていく、市場も小さくなっていく、将来に対する不安、悲観、そういったことが一つの課題になっているわけでありまして。そうした課題を今、アベノミクスの成果が生まれてきている、こうしたものを使って乗り越えていきたい、こういう思いであります。

まず、旧三本の矢によって企業の収益は増加をしているわけでありまして。これを雇用の拡大、賃金の上昇、そして投資の拡大、そしてそれが消費をさらに拡大をしていく。またそれが企業の収益を生んでいく、こうした循環をさらに今回の希望を生み出す強い経済、これによってさらに強めていきたいと思っております。そして、この経済の好循環で生み出されたこの成長の果実、これを子育て支援や、あるいは安心につながる社会保障、こういった分野にしっかりと分配をしてまいります。働く希望を持ちながら働けなかった方々が例えば働いていただけるようになるなど、一人一人が生きがいを持っていける、こうい

う社会の実現を目指してまいります。女性も若者も高齢者も障害のある方も一度失敗した方も、こうした様々な分野において活躍をしていただく。まさに、そうした中で労働力、働く人の数も増えていく、そしてさらに色々な方々がそれに参加をしていくことで多様性も広がっていくわけであります。それが新たなアイデアやイノベーション、そしてそれを通じた生産性の向上、これによってさらにまた強い経済、経済の成長にもプラスになっていく、また長い目で見れば人口の減少の歯止めにもつながっていく。まさにこの大きな循環、成長と分配のこの好循環、これをしっかりと作っていきたい。また、そうした新たな経済社会システムの構築に挑戦しようと、こういうものであります。

そしてまず、第一の矢であります希望を生み出す強い経済、今私共は先ほど申し上げました個人消費が遅れている、あるいは設備投資が弱い、あるいは人手不足が顕在化している、こういう状況に対して、この中にありますような施策を展開してGDP600兆円、この実現を図っていきたいと思っております。例えば最低賃金、現在全国加重平均798円でありますけれども、これを1,000円に向けて年率3%の引き上げを、是非、図っていきたい。この地元大阪府は平均で858円というふうに承知をさせていただいております。

そして、二番目が第二の矢。夢を紡ぐ子育て支援であります。結婚に至る機会が少ない、結婚しようと思ってもなかなか経済的な基盤が確立できない、あるいは仕事と家庭の両立が難しい。さらに言えばひとり親や生活環境、こういったものへの対応が必要である。こういった課題にこうした施策を展開することによって、結婚し子供を生みたいという希望が叶う。まさに希望出生率1.8を、是非、実現をしていきたいと思っております。例えば、この多様な保育サービスの充実、今待機児童の問題も色々と議論されているわけであります。これにしっかりと対応していかなければならないと私ども考えております。緊急対策の中でも、当面2017年までに40万人の受け入れをしようとしていたこの受け皿をさらに10万人アップして50万人ということにしております。しかし同時に、そこで働く保育士の方々、これをしっかりと確保していくことが必要であります。保育士の方々の処遇の改善、こういったことにもしっかりと取り組んでいきたいと思っております。

続いて第三の矢でありますけれども、高齢化が進む中で働き盛りの方々が介護離職をするという状況がございます。年間10万人の方が介護離職をされているという数字もございます。また介護は誰もが直面する課題でもあります。介護と仕事の両立によって介護離職ゼロ、こうした施策を展開して進めていきたいと思っております。例えば、介護サービスの基盤確保ということで、2020年度までにおいて50万人分の介護施設や在宅サービスの整備を進めていくと同時に、やはり介護人材を確保していくために、介護職の皆さんの処遇改善、この議論にもしっかりと取り組ませていただきたいと思います。そしてこうした成長と分配の好循環を作り出していくためには、今申し上げた三本の矢、

加えてまずは生産性の向上、生産性革命を実現していかなければならないと考えております。経済成長を図っていくためには基本的に人口が増えていく、あるいは資本が拡大していく、生産性が上がっていく、この三つの要因が言われているわけでありますが、日本は今人口減少に向かっているわけであります。この中で過去最高の記録している企業収益、これを未来への投資、生産性の向上につなげていく、具体的にはこうした施策を展開していきたいと考えております。

そしてもう一つは働き方改革であります。非正規雇用者の方々、今働く方々の約4割が非正規の形で働いておられます。特に子育てをされている女性におかれては自らの選択として非正規を選ばれている方もいらっしゃいます。しかし、実際今、その賃金水準を見ますとフランスドイツが8割、9割、フルタイムの労働者に対して8割、9割の水準に対して、日本は6割弱とやはり賃金水準が低いと考えております。こうした同一労働同一賃金にも踏み込んで、非正規雇用労働者の方々の待遇改善、これをしっかり図っていきたいと思っております。

そして、二番目としてはやはり働き過ぎという指摘があります。我が国の総労働時間、もう2000時間ですと推移をしております。30代で働く男性の60時間以上働く方は17%と国際的に見ても長時間労働であります。時間外労働時間の抑制と長時間労働の是正にも取り組む必要があります。

そして最後に、やはり高齢者の方々に生きがいを持って生活をしていただく、そしてそのことにはある意味では元気になり、あるいは元気を継続していただく、介護を受ける状況になりにくくなるということにもつながっていくわけでありますけれども、60歳以上の方に対して65歳を超えても働きたいですかとアンケートを取りますと、7割以上の方が何らかの形で働きたいと。しかし実際に働いている方は2割であります。そして今60歳が定年ですが、それが65歳まで定年、雇用を継続していくと、こういう形になっておりますが、実際は定年延長廃止でやっているのは約2割、いわば非正規の形で継続雇用されている割合が圧倒的な8割と、こういう状況であります。高齢者の雇用を促進していくためにも、定年を延長する企業、あるいは65歳以上についても継続的に働こう、働いてもらおうとする企業、こういったことに対して奨励等をしっかり行っていく必要があると考えております。

そして最後に、地元近畿圏の状況であります。まず左上のグラフを見ていただきますと、これからの流れであります。高齢化が進んでいく、そして特に近畿圏の場合には少子化が全国よりもやや早いスピードで進んでいるということがここから見て取れます。そしてこちらが合計特殊出生率、女性が生涯を通じて子どもさんを生む数でありますけれども、昭和60年と比較しまして平成26年、この落ち方がやはり全国に比べて大変大きく減少しているということが、一つ指摘ができるのではないかと思います。それから女性の有業率の関係でありま

すけれども、育児をしている女性の有業率と女性全体の有業率を見ますと、育児をしている方の有業率が全国と比べても低いということも指摘されているところでもあります。

さらには、先ほど申し上げた待機児童の関係でも、大阪では今1,365名、これは27年4月去年の春ではありますけれども待機児童が発生をしている。また要介護認定も全国と比べて高い、こういう意味では生涯現役社会の実現に向けて、色んな取り組みが求められているのではないかなと思っております。以上、一億総活躍社会、我々が考えている状況を簡単にご説明させていただきました。この後は登壇している皆さま方からの意見交換、そして会場の方からも意見を聞かせていただいて、この実現対話を進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○司会 加藤大臣、ありがとうございました。それでは、意見交換を始めていただきます。ここからの進行は、田中茂明内閣官房一億総活躍推進室次長、よろしくお願いいたします。

○田中一億総活躍推進室次長 はい、それではさっそく進めさせていただきたいと思っております。本日は13名の方々にご参加いただいております。ステージに向かって右側から順に、それぞれのお立場での経験や一億総活躍社会の実現に向けたご要望などをお伺いしたいと思っております。

それでは最初に、専門学校で建築設計を勉強していらっしゃる米谷 理沙さんからよろしくお願いいたします。

○米谷氏 大阪工業技術専門学校 建築設計学科の米谷 理沙と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。私は大学卒業後、ホテルスタッフとして働いておりましたが、新規ホテルの事業オープンに携わったことがきっかけで、建物が人々に与える影響力の強さというものを体感いたしました。ソフト面より提供するサービス業からハードとして具現化していく建築の世界への転身を決意いたしました。そして、一から建築設計を勉強するために、現在の専門学校へと再進学をいたしました。現在は入学当初から希望しておりました商業建築業界の会社から内定をいただいております。就職活動を通じて、私が異なる分野への転身を不利に感じたことが一度もなかったのは、社会人経験者が集うリカレントクラスでの学びを、学びの環境として選択したことが大きいと感じております。私が商業建築に魅かれている理由は、商業空間はその場にいる全ての人々の人生のシーンに色を付けるような影響力を持っていると感じたからです。だからこそ、私が前職で培ってきたスキルは無駄にはならないと考えており、むしろソフト面とハード面との視点を兼ね備えた多岐にわたる空間創造の技術者になることが現在の私の夢であります。このように、過去の経歴を点

として捉えるのではなく、線として結び付けていけることが私の強みであるということをお教えくださったのが現在の専門学校なのであります。多様な生き方や働き方が注目されている現代社会であるがゆえに、時に人生の選択において不安や迷いが生じてしまうこともあります。新たな分野で学びたいという欲求が生まれ出ても、その思いだけで行動に移すには不安とリスクを感じざるを得ません。私は恵まれていたことに、挑戦しようと思った時、周りの理解や温かな応援によって背中を押していただき、支えられているという実感が挑戦しようという思いややる気へと変わりました。しかし、様々な事情により、挑戦したくても身動きが取れない方々は多くいらっしゃると思います。経済的な支援を始めとするサポート体制を希望すると同時に、私はリカレントクラスのような異なる分野への経験が新しい環境下においても活かしていけるような環境づくりを作っていただきたいと思っております。仕事を辞め、再進学を決意した際に、最も不安だったことが将来への進路です。仕事の際に実感したことが、本校のようなリカレント層を対象としている学科を設置している学校が意外と少なかったということでした。それぞれの経験により活躍の場を広げ、生き方の多様性を目指すためには、企業を始めとする社会とイノベーション創出の場との密接な関連づくりが必要不可欠ではないかと感じております。ありがとうございます。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございます。続きまして、大学生の藤井 優斗さん、お願いいたします。

○藤井氏 はい、関西大学外国語学部4回生の藤井 優斗と申します。まずは大学生生活で苦労したことについて話をさせていただきます。私は大学2回生の頃、オーストラリアで海外留学を約1年間経験したのですが、その途中、今までに経験したことないほどの挫折を味わいました。というのも、私はグループディスカッション形式の授業を受けていたのですが、周りの学生が全員英語のネイティブスピーカーということで授業に全く付いていけず、ひどい時には90分間一言も話すことのできないまま授業が終わることがありました。その時に、それまで培ってきたはずの自分の英語力への自信というものは一気に崩れ去り、もう授業に出たくない、もう日本に帰りたい、そういう気持ちになりました。しかし、小学校5年生の時から夢であった留学を価値あるものにしなければならいと考え直し、英語力を磨く決意をしました。具体的には英会話サークルに参加したり、外国人の方に日本の文化や日本語を教えるサークルに参加したりしました。そうすることで、少しずつ自分の英語力に自信を持つことができるようになり、最終的には良い評価を得ることができました。

さて、私は4月から新社会人ということで、総合商社で働くことが決まっております。留学中に日本の食べ物や製品、文化が高く評価されていることに喜

びを感じて以来、日本の物を海外に広めたいという目標があります。ですので、留学中に培った粘り強さを武器に、いち早くプロフェッショナルな社会人になり、自分の目標を叶えたい、そう思っています。

最後に私が今の社会に期待していることを、一大学生という立場から話をさせていただきます。オーストラリアでの留学中に私が感じたことは、海外の大学生は自分のビジョンがしっかりとしており、自分の成りたい夢、目標というものが明確でした。そしてそのために勉強をしている、そういった印象を受けました。一方、日本の大学生は中高生の頃からテストのための勉強や受験のための勉強を強いられてきたためか、何がやりたいのか自分は何になりたいのかが分からないまま、とりあえず大学に入り、そして単位取得のために勉強をしている、そういう大学生が比較的多いのではないかと、そのように感じております。実際に私は塾講師のアルバイトをしておりましたが、夢や目標を語ることができない中高生が多かったように感じます。ですので、そのような生徒が何のために勉強をするか分からないまま、ひたすらテスト勉強に追われるようなことがないような教育を考えていただきたい。つまり、受け身ではなく自分の頭で考え、そして行動するようなそういう教育方針を考えていただきたいと思っております。そうすることで今よりも自分の将来について深く考え、今より有意義な4年間を過ごすことができる大学生が増えるのではないかと、そのように思っております。以上です。ありがとうございます。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございます。次に職業訓練中の是松 礼子さん、お願いいたします。

○是松氏 ポリテクセンター関西よりまいりました是松 礼子と申します。よろしくお願いいたします。私は同志社大学工学部を卒業後、大阪のメーカーで知的財產業務を6年と8カ月経験しました。その後退職し、妊娠期間中にはパートタイムでデータ入力業務を4カ月ほど携わり、出産の準備のため退職いたしました。子どもが1歳になったので再就職を目指して現在は職業訓練を受講しているところです。職業訓練の受講のきっかけは最寄りのハローワークの相談でした。子どもが1歳ということで、新しい就職先というのがなかなか見付からない状態で、さらに子どもの預け先というのも認可の保育施設も認可外の保育施設もどこもいっばい見つからないという状態でした。ハローワークで状況を相談したところ、公共職業訓練というものがあると紹介していただきました。新たな技能や知識を習得しておくことは、これからの就職活動にとってもプラスになると思い、訓練の受講を検討しました。訓練の内容は様々な分野で実施されていまして、私自身の知識と経験を活かしつつ、少しでも就職先の幅を広げられる分野に挑戦しようと思い、機械設計分野のコースを選びました。受講にあたっては子どもを預けなければならないのですが、たまたま託児サー

ビスを利用できる訓練コースだったので、受講を決意しました。現在、受講4カ月目でとても有意義な時間を過ごしています。訓練を通じて専門知識が増え、スキルアップできていると感じます。これからは育児と仕事が両立できる範囲で働ける長期雇用の就職を目指して頑張っていきます。最後に、社会や政府に期待することとして、保育施設を増やしてほしいです。昨年から今年にかけて小規模型の保育施設が増えましたが、全然足りていません。また、0歳から2歳児ということで、その後の3歳児以上の受け入れの可能な施設が全然足りていないという状況でとても困っています。妊娠、出産を機に退職した女性が再就職するには、まず求職活動の段階で、子どもを受け入れてくれる保育園が必要です。早期に対応していただきたいと思います。以上です。

○田中一億総活躍推進室次長 はい、ありがとうございました。ではここで意見交換を行いたいと思います。加藤大臣いかがでしょうか。

○加藤一億総活躍担当大臣 はい、ありがとうございました。米谷さん、また新たに挑戦をしようということで専門学校に通っておられる、お話しのなかにリカレントクラスというお話がありました。多分あんまり会場の方にリカレントクラスというイメージがつかめてない方もいらっしゃると思いますけれど、通常のいろいろな専門学校、例えば高校を出てすぐ行かれています人を主として成り立っている場合が多いのだと思うのですが、一回社会人としていろいろ経験し、もう一回学び直して次にステップアップしていこうという方が多いのだと思うのですが、特にリカレントクラスというものが必要だとおっしゃったわけですが、特にどこが具体的に違うのか、体験からで結構ですのでお話しをいただきたいと思うのですが。

○米谷氏 やはりクラスメイト、全ての方が、一度社会人経験があったりとか、主婦の方もいらっしゃるの、私が経験してなかった視点であったり、考えというものを得られたりですとか、実際に働いておられる非常勤の先生方もいらっしゃるの、カリキュラムもより社会に近いような授業カリキュラムが多いのがとても魅力的でした。

○加藤一億総活躍担当大臣 いろいろな意味で刺激もあるということでしょうかね。ありがとうございます。続いて藤井さん、オーストラリアでの留学を含めて、今、商社に内定して次に向けて頑張っていられるところだと思います。今お話があった、海外の方と比べて日本の学生の方が具体的な夢や目標がどうも持っていないのではないかと、大学するときもあると思いますが、高校のときにどういう進路を選ぶかというのが非常に大きいのだと思うのですが、そのへんで何かお考えありますか。

○藤井氏　そうですね。高校3年生の授業を、塾講師をしている中で担当することもあったのですが、進路が決められず悩んでいる生徒がたくさんいて、そういう生徒はこれまでに自分の将来について考える機会というのが少なかったと思うので、そういうところを増やしていただきたいなと考えております。

○加藤一億総活躍担当大臣　ありがとうございます。最後には是松さんからしっかり保育施設を増やしてほしいということで、我々もしっかり取り組んでいきたいと思っていますし、特に働く方の確保、処遇改善、こういった問題意識を持って取り組みたいと思うのですが、是松さんの場合、一回お辞めになっていますよね。その時に継続して例えば育児休業をとって、もう一回仕事に戻るといことはお考えにならなかったですか。

○是松氏　私自身、妊娠期間中に切迫の可能性があるということでやむなく退職することになりましたので、残念ですが続けることができませんでした。

○加藤一億総活躍担当大臣　今新たにハローワークで勉強されておられて、これから次に向かって行かれるという事なのですが、もう既に就職活動は少し始めておられますか。

○是松氏　はい。

○加藤一億総活躍担当大臣　それを通じてハローワークで今、習得された事が就職活動においてはかなりプラスになっているという実感は持っておられますか。

○是松氏　専門の授業があるのですが、その授業を経て、とても私自身にプラスになっていると感じています。

○加藤一億総活躍担当大臣　どうもありがとうございました。

○田中一億総活躍推進室次長　ありがとうございました。それではさらに進めてまいります。次にパートタイムから正社員への転換を目指していらっしゃいます尾方 由香里さん、よろしく申し上げます。

○尾方氏　上新電機株式会社から参りました尾方 由香里と申します。私のただ今の状況ですね。私は29歳でパートタイムとして上新電機に入社をいたしました

て、当初は社員を目指すという気持ちがなくて、気軽に日々の生活をできれば良いかなぐらいの軽い気持ちでの入社でございました。仕事に慣れてくるにつれて、いろいろとパートタイムながらもやりたいことが出てまいりまして、3年目に上司の勧めでそれがきっかけとなりまして、昇格試験を受けました。何回か受けたうえで落ちたりもしたのですが、昨年4月に昇格をいたしまして、ただ今は準社員という形で働いております。現状としては、他の男性社員と区別されることなく、女性でも同じように責任を負って仕事をさせていただいております。政府へ期待することとしては、パートタイムで働いている間は収入が普通の社員と比べて安定しない部分がありまして、一人暮らしをしていると病気にもなれないとか、親の介護がもし出てきた場合に仕事を辞めざるをえないとなったときに、将来どうやって生きていったらいいのかなという不安がずっと付きまとう形なので、できれば将来安心して生活ができるように示していただけたらなと思っております。以上でございます。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございます。次に育児のために短時間勤務をされていらっしゃる貴志 ヒカルさん、お願いいたします。

○貴志氏 株式会社高島屋に勤務しております貴志 ヒカルです。よろしくお願いいたします。私は現在、会社の育児のための短時間勤務制度を活用しながら、32人の部下を持つ管理職として百貨店の売り場で働いております。子育てと仕事の両立は会社の制度だけではなく、夫、父、母など家族の協力、さらには国や行政の制度を活用しながら働くことができます。私の職場では32人の部下のうち、約4割の女性が家庭の中で介護、育児、看護を担いながら働いています。私を含め、子育てや介護をする職場メンバーから挙がる声は保育園の待機児童問題や介護施設の不足などの国の継続的な課題以外にも、毎日の生活の中で子どもや親の急な病気の際の看護、女性に偏りがちな家事の負担など、生活の足元を支える仕組みが必要であるという声が切実な声として多く挙がってきています。私自身は短時間勤務を取得しながら管理職として働く中で実感するのは、共働き世帯が標準となってきた日本において女性の仕事と家庭を両立し、もっと働きたい、社会に出てもう一度キャリアを積みたいという気持ちをサポートする仕組みが企業の制度や個人の努力だけではなく、社会全体で支えあう仕組みとして整っていくことこそが大切ではないかと感じています。今後日本では少子高齢化が進んでいく中で、私たち生活者の暮らし方は大きな変革が求められてくると思います。一方政府が掲げる日本再興戦略は女性の力を我が国最大の潜在力と位置付け、これを最大限発揮する事こそが社会全体に活力を与えることにつながるとうたっています。そうであるならば国民の足元の毎日の生活や家事、暮らしの見直しのための支援策や向上策を、是非、ご検討いただきたいと思います。例えばですが、世界へ目を転じますと、女性の就業率

が高い国々では子どもの見守りや高齢者の支援、家事代行を行政サービスだけでなく、民間業者のサービスを必要とする人が必要に応じて低価格で受けられる暮らしのためのバウチャー制度が整備されています。また働きながら介護や育児をする際、利用するシッター代などを控除対象とするなど、税制控除策導入も、是非、ご一考いただきたいと思います。安く上質で安心な生活支援サービスを利用できる環境整備を推し進めていくことは新たな雇用を生むなど、経済のフィールドを動かす力にもつながると思います。育児や介護を理由に離職に悩んだり、再チャレンジする志を諦めることがない社会の実現、社会全体の支えあいの気持ちを仕組み化できる政府主導の取り組みを期待いたします。ありがとうございました。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございました。続きまして在宅勤務制度を利用されていらっしゃる井口 裕美さん、お願いいたします。

○井口氏 私はパナソニック株式会社で人事をしております井口 裕美と申します。この度はこのような貴重な機会をいただき、ありがとうございます。本日は私の社内における在宅勤務の経験についてお話をさせていただきます。私は2012年12月に長女を出産しまして、1年4か月の育児休業を経て、職場復帰をいたしました。その後今まで約2年間ワークアンドライフサポート勤務という社内の短時間勤務制度と週に一度ほどの在宅勤務制度を利用して、仕事と育児の両立に取り組んでおります。人事の仕事内容といたしましては、従業員の異動や処遇に関する事、また慶弔やお困りごとに関する事についてフェイストウフェイスや電話での対応がございます。また一方集中して作業しなければならない集計や作表、文章作成等の業務も多くございます。そんな中で従業員からの急な依頼や相談、また管理部門からの問い合わせ等を受けていますと結果としてその日もともと予定していた業務ができなかったという問題が発生することがしばしばあります。そこで私が活用しているのが週に一度の在宅勤務です。時間に制約のある私にとっては自宅でまとまった仕事を集中して対応できるというところが大きなメリットです。集中して行うべき仕事は出来るだけこの在宅勤務の時間に対応できるよう、あらかじめスケジュール管理を行うこと、それが入社しなくても仕事に支障をきたさないための重要なポイントであると考えています。さらに私は通勤に往復2時間掛かっておりますため、その通勤時間をかけずに限られた時間を有効に使えるということも大きなメリットです。一方で自分にとってメリットである在宅勤務ですが、私が不在のあいだ、会社のほうで仕事をしてくれている同じ職場のメンバーにとっては負担となっていることも事実です。例えば私を訪ねてきた従業員の対応等してくれていまして、職場のメンバーの理解と協力があってこそ、今の私の仕事が成り立っていると言えます。以上を踏まえまして、在宅勤務は職種によって向き不

向きはあると思いますが、事前の業務スケジュール管理と同僚のサポート、そして会社の制度としてのインフラ面でのサポートがあればどなたでも活用できる勤務形態であるとは私は考えております。以上です。ありがとうございました。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございました。続きまして超過勤務の縮減に熱心な企業で勤務をされていらっしゃる笹岡 敏さん、お願いいたします。

○笹岡氏 住友生命保険相互会社で勤務しております笹岡 敏と申します。よろしくお願いいたします。私が勤務する住友生命では会社全体で夜8時以前の退館を徹底しております、お客様にご迷惑がかかる等のよほどの事がない限りは8時以前に退社するようにしております。私は朝早く出社する習慣がついておりますので、社内通知やメールのチェックをしながら仕事の準備をするようにしております。どうしても自所属関連の情報ばかり目がいきまいますけれども、朝の時間で所属業務とは関連が低い情報を取り入れるようにしております。私入社は平成20年4月でございましたけれども、当時は残業も今より相当多かったですし、会社の取り組みとしても今より徹底はされてなかったように思います。この8年間で働き方を見直す取り組みを会社全体で行った成果が現れていると私も感じております。有給休暇とは別に年に4日特別休暇が付与されまして、完全取得するまで上司から予定を確認されるようになっております。また休日に出勤した際も必ず平日に振替えの休みを取得するように指導されております。また時間外勤務ですとか休暇取得を推進するとともに日々の業務効率化にも積極的に取り組んでおります。部長が座長を務めます「業務効率化プロジェクトチーム」が発足するほど、働き方の革新に対する長の意識も高まっております。また、個人的には昨年第一子が誕生いたしました。平日の仕事が終わった後、また休日に子どもと過ごす時間が私の仕事の活力になっております。また趣味でサッカーやフットサルもしております、平日休日関わらず、仲間と体を動かして日々の仕事の疲れを癒すリフレッシュをしております。また会社も働き方を革新しようという取り組みを「ワークスタイルイノベーション」と名付けて強力に推進しております。ただまだ長く働くことが美德という意識がまだ会社内に残っているように感じますので、徐々に徐々に根付かせていくことが大事なのだなあと感じております。最後に社会や政府に期待することでございますけれども、今の会社しか勤務経験がないので、あまり偉そうなことは言えないのですが、やはり日本人は真面目で勤勉だと思いますので、ある程度の強制がなければ超過勤務縮減やワークライフバランスの実現は難しいと感じております。会社で長が率先して休暇取得ですとか業務効率化を推進するのと同じように、国がある程度強制力をもった働きかけをすることが非常に重要だと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございます。続きまして、家事や育児をしながら起業された、麻生 満美子さん、お願いいたします。

○麻生氏 皆さん、こんにちは。海外よりベビー服、子ども靴を輸入、販売しております、リリーアンドデイズ株式会社を経営しております麻生 満美子と申します。よろしくお願いいたします。私は結婚、出産を機に12年間勤めていた会社を退職しました。子どもが1歳の誕生日を迎えた頃、仕事の再開を試みましたが、小さな子どもを抱えての再就職は難しく、それなら何か自分でできないか、起業できないかと思ったのが創業のきっかけです。最初は何をしようか、自分には何ができるのだろう、何の手掛かりもない状況でしたが、自分にはパソコンができる、自宅に小さなスペースがある、わずかながら資金があるなど一つ一つできる事を考え、今の仕事を選びました。この頃の私は子育て真っただ中の状況でしたが、決して何もできない逆境ではなく、むしろ小さな子どもがいたからこそ、できた仕事であったと思います。その後少しずつではありますが、スタッフも加わり、売上も僅かながら上がってきて、個人事業主から株式会社へと成長してまいりました。仕事をするうえで家事、育児をどうするかというのは女性にとっては大変な課題となっております。私もそうでした。再就職を希望したのですけれども、小さな子を抱えては、面接を受けることでさえ、億劫な気持ちになりまして、また、就労後の保育園の問題も想像するだけで、とても気が重くなりました。

起業後は、家事、育児、仕事のバランスをどう取るか工夫をしまして、想像以上に体力的にも、精神的にもパワーを使いました。

こうやって乗り越えられたのは、夫の協力、そして家族の理解というのがあったからだと思います。女性が働く上で、何より理解と協力を求められているのは、身近な家族、そしてパートナーであるということ強く感じました。

最後に、私は、人生は自立することで、より輝くと考えています。好きなこと、やりたいことをしていただける生活を実現することが、人生を輝かせ、そして充実していくものだと思っています。以上です。ありがとうございます。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございます。では、ここで意見交換を行いたいと思います。加藤大臣、いかがでしょうか。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。尾形さんは、今、パートで入られて、準社員、そして今、正社員という、非常にそういう仕組みを持っておられる会社。そういう意味では、ある意味、進んでいる会社じゃないかなというふうに思うのですけれども、そうやって今の会社でそれぞれこう、最初はパートタイマーでいいやというところからスタートされたというお話なので

すけれども、上司からもあった、そしてしかし、ご本人の希望でそうしたステップアップしていく中に、もちろん、安心ということもあったと思いますけれども、それ以上にやりがいとかですね、そういったこともあって挑戦されていたと思うのですけれども、その辺、もう少し、お話していただければと。

○尾形氏 そうですね。だいたい、3年ぐらい仕事を続けて、基本業務をもう覚えてきたときに、自分のやりたいこととか、使っているシステムで改善点とかが見えてきたときに、それを聞き入れてくれない人とかも社内にはいたわけなのです。そういう人たちを見ていると、それやったら自分でやったらわみたいな感じで、そういう愚痴をずっと上司に話していたらですね、上司の方から、それやったら自分で受けてみなさいと言われたので、まあ、きっかけになりましたね。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。それから、貴志さん、今、それぞれ、例えばベビーシッター等、様々な仕事をしながら働くときに、もちろん、配偶者の方の協力、あるいはもし3世代であれば、おじいちゃん、おばあちゃんの協力もありますけれども、なかなかそういう協力を得がたい場合、まさに民間からのいろいろなサービスも使ってくる。それがあある意味では、経済の発展にもつながってくるというお話をしていただいたのですけれども、これは今、我々もやりたいと思っておりますし、今度、来年度予算からは、ベビーシッターを企業が使う方に対して、助成をする場合には、それを、支援拡大をしていこうと、そんな措置も考えているのですが、あの、短時間勤務しながら、32人の方の管理職ってこれは、大変なことだと思うのですけれども、その辺の秘訣とかですね、しかし、それが私はどんどん広がって行って欲しい。そういう形の働き方も広がって行って欲しいなと思うのですけれども、ほかの会社で広げていくために、こういうふうにしたらいとか、そういう何か、示唆することはございますか。

○貴志氏 はい、先ほども、社会の中での支え合いの仕組みというお話をさせていただいたのですが、企業、組織の中においても、お互いに支え合う気持ちがあつてこそ、初めて、制度も活用できると思っています。なので、私は、管理職としてはまず、風土を作っていくということ。それから、もちろん、私自身が短時間の勤務ですので、私がないところをフォローできる人材を育てるということに注力をしておりまして、特に百貨店ですので、長時間勤務、それからあるいは変則労働時間というようなこともございますので、その辺りを、みんなが力を合わせるという風土づくり、これは社会においても同じではないかなと思いますので、是非、これも、国全体がそのような雰囲気になっていくことを望んでおります。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。お互いの仕事をよく理解しながら、任せることは任せながらやっていくってことですかね。

○貴志氏 そうですね。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。井口さんは、在宅勤務ということでお話をいただいたのですけれども、在宅勤務の1日の姿。結構、皆さん、会場の方も、あまりやっている方多くないと思うのですけれども、どんな勤務、勤務っていうのですかね、どんな生活ぶりになっていくのかちょっと教えていただければ。

○井口氏 はい。在宅勤務の日の1日ですけれども、普通に朝起きて、パソコンはご家庭にある、デスクを準備して、照明も明るく、エアコン等もつけて、本当に机に座って、パソコンで作業をしていることがほとんどです。昼食時間とかトイレ休憩とかをはさみまして、基本的にずっとパソコンに向かっているという状況です。

○加藤一億総活躍担当大臣 じゃあいわば、家の中で、会社のように勤務をしていると。

○井口氏 はい。

○加藤一億総活躍担当大臣 小さいお子さんがご一緒には。

○井口氏 保育園にそのときは行かせて。

○加藤一億総活躍担当大臣 分かりました。ありがとうございます。それから、笹岡さんのところは、残業の縮減に努めておられるということですが、6年前から会社全体で取り組むというのは、何かきっかけがあったのですか。

○笹岡氏 きっかけはちょっと、私も把握していないのですけれども、だんだんと本社の人事ですとか、勤労部の方から、休暇取得を推進しましょうですとか、土曜日、日曜日出勤したら、必ず振替休日を取得しましょうと、まあ、そういうあの、上からの働きかけが非常に強くなってきたのが、最近かなというところでございます。

○加藤一億総活躍担当大臣 残業自体を縮減すると、それは働き方という意味

でプラスもあるのですが、残業代が減ってしまうというところがありますよね。その辺はどう。会社の中では対応は考えておられますか。

○笹岡氏 それよりも、残業代という話が出るよりも、まず、超過勤務が、朝7時から夜9時すぎまで勤務するという、勤務形態が常態化している方もいましたので、まずそういったところを縮減していこうという会社の強い取り組みが推進されているというふうに考えています。

○加藤一億総活躍担当大臣 仕事効率的にということにも繋がるのでしょうか。

○笹岡氏 効率的に。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。麻生さんは、2010年には女性起業家大賞も受けられているということで、やはり女性の方々が企業を起こしていく。まあ、一つは就職するという選択肢ももちろんあります。一方で、起業をしていくというのも一つの選択肢だと思って、我々も支援をしていきたいと思うのですが、特にこういった支援があるとまた多くの方々がそちらの道も選択できるのではないかなというアドバイスはありますか。

○麻生氏 私もそうだったのですが、最初、何をしたいのか、どこから始めていいのか。で、店なのか会社なのか。全く手探りの状況だったのですね。で、私はもう独学で、一人で、なんか切り開いていったような感じがあるのですが、やはりそのときに、地域のサポート、それから例えば、セミナー、商工会等の講演等、そういった機会が、アドバイスをしてくださる方がいらっしやると、もっとスムーズに行くのではないかなというふうに思います。で、プラス地域のサポートというのも必要じゃないかなと思います。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございます。それでは、次に障害を抱えながら勤務をされてらっしゃいます、目良 賢治さん、お願いいたします。

○目良氏 目良 賢治です。よろしくお願いします。私は、現在、障害者の相談と介護派遣をおこなっているNPO法人でヘルパーやスタッフの給料計算などの事務をしています。私は今から21年前に、大学を卒業して、警察官になるために、全寮制の学校に入りましたが、厳しい訓練や寮生活に馴染めずに、精神疾患になり、辞職しました。そのあと、病気のことを開示せずに就職した会社でも、電話対応がうまくできないなど、普通の人があまり苦勞しないことで苦手

なことが多く、仕事が長続きしませんでした。今までに2回の入院歴があり、何日も眠れなかったり、妄想があったりして、大変なときがありました。この疾患の急性期はさほど長くなく、そのあとにデイケアや作業所に通い、リハビリをするケースが多いです。このリハビリの時期は、絶対に必要なのですが、就職の面接時に、履歴書の職歴欄に空白の期間ができてしまい、そのときに精神疾患だったことを明らかにすると、必ずと言っていいほど、不採用になります。この疾患後は、脳と体の休息が必要なことをもっと皆さんに理解してもらいたいです。

就労を望む人にとっては、このデイケアや作業所も居場所ではなく、通過点なので、ある程度、病状が回復したら、就労支援をしてくれる機関を通じて、仕事につき、職場との間にも入ってもらい、人間関係や勤務時間、職務内容などを調整してもらえれば、仕事が続けられると思います。私も、JSN、大阪精神障害者就労ネットワークというところの支援を受け、ジョブコーチや勤務先の方々、家族の助けや協力もあり、7年、仕事が続いています。本当に感謝です。

一億総活躍社会実現のためには、精神疾患を持つ人の社会参加も必要です。そのような方の多くは、就労を希望し、もっと真剣に生きたいと願っています。病状が回復して、就職することがその第一歩です。どうか、すぐに辞職することなく、働き続けることができるように、JSNのような就労支援先がもっと定着支援にも力を入れることができるように、国の財政的なサポートが今以上に多く受けられることを期待します。ありがとうございました。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございました。次に、ご高齢で勤務を続けていらっしゃいます、清水 徳熙さん、お願いいたします。

○清水氏 京都からまいりました、京都中央信用金庫の清水でございます。本日はよろしくお願いいたします。

私は現在、73歳です。年齢的にも、毎日の勤務となりますと、体力的に非常に厳しいですが、現在、週4日のペースで仕事をしていると、これまで時間に追われてできなかったこともでき、ときには孫の面倒を見て、いつまでも気持ち若く保っていくこととなります。56歳で、現在の勤務先をいったん退職。出向した会社に転籍し、約10年、精一杯勤め、65歳で引退を考えたところに、現在の会社から、高齢者雇用を積極的に行うため、非常勤嘱託という新しい制度ができ、真っ先に声をかけてもらい、今でも感謝をしております。この制度で私が第1号として採用されてから、年々、仲間が次々と増え、今も彼らが頑張っている姿を見ると、高齢者のパワーを大きく感じます。これから後へ続く人のことを考えると、高齢者でも働く意欲があって、健康であれば、まだまだ頑張れるだろうと思います。会社の、また社会に貢献できるという姿を示し、これからも高齢者雇用を本当の意味で、定着していけるように自ら、手本

を示さなければという責任も感じております。

年金の受給開始年齢が徐々に引き上げられ、生活を維持していくために、働き続けなければならない事態が生じていることも事実であります。おかげさまで私は元気です。不幸にも病気で働けない人もいます。家族の介護で仕事に没頭できない人もいます。また、子どもさんを預けるところがなく、仕事になかなか復帰できない人もいます。働きたい、働かなくてはいけないと思っても、自分自身の環境が許してくれないこともあります。老いも若きも、男性も女性も、それぞれが持ち味を発揮することがこれからの少子高齢化社会では絶対に必要不可欠であり、そのためには官と民、そして自分自身が一生懸命、真剣に考えていく必要があると考えます。ありがとうございました。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございました。では、ここで意見交換を行いたいと思います。加藤大臣、いかがでしょうか。

○加藤一億総活躍担当大臣 障害を抱えながら頑張っておられる、また、ご自身の体験を障害者、企業で働く方の語り部としてもご活躍をいただいている目良さん、すごい活躍をしていると聞いています。あの、やはり定着していくその企業で働き続けるためには、その企業における様々な対応というか、ケアが必要になってくる。それを外の機関が定着すべくサポート支援をとということなのだと思うのですが、受け入れの企業にとって、特にこういうところに配慮してもらおうと、働いていけるのだらうなというところがあれば、是非、教えていただきたいです。

○目良氏 まず、精神障害を持った人というのは、一度にたくさんのことをこなすというのがあまり得意でないので、少しずつ仕事をできるようになって増やしていったらもらえると助かります。私の場合も、一応、今は電話対応も含めていろんな事務をしていますけれども、最初、入社したときは、その給料計算のみに専念させてもらって、電話が鳴っても出なくていいよと言われて、で、半年ぐらい経ってから、電話も出てくださいと言われていたので、徐々に職務を増やしていくようなことをしてくれたら、精神障害者の方も頑張って働けると思います。

○加藤一億総活躍担当大臣 だんだんしていくことによって、よりしっかり働ける。

○目良氏 そうです。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。それから、清水さんは、

今も週4日で働いていらっしゃるという。

○清水氏 ええ、現役で頑張っております。

○加藤一億総活躍担当大臣 70歳をさらに超えてまだ継続雇用ということで働いておられるのですが、先ほどもちょっと申し上げた、65歳以上でも働き続けられるような、またそういう企業を我々も応援していきたいと思うのですが、そういうときに、どういう仕組みだと、実際働いている方が、もっとよし、頑張ってみようという気持ちにさせていく、そのためにはこういう仕組みだとよりそういう気持ちになっていく。そういうなんか、制度といいますか。

○清水氏 私自身が考えるのには、もう、この人たちは年寄りだという見方をされますと、我々のプライドにも多少傷がついてまいりますので、目標を持ちながら、この方たち、先輩から物事を教育していくのだという若い人たちの、このへんの指導も、人事の方からやっていっていただかないとダメだと思うのです。

○加藤一億総活躍担当大臣 やはりそうした皆さんは、受け入れるというか、一緒に働く方々の姿勢というか、気持ちということもわりあいと。

○清水氏 そうですね。一つ、例に出しますと、歳いったものは、その場において、今まで難しい仕事していたのに、これコピーしてくださいというような形で、女性から、若い女性から言われますと、もう長続きすることはまず難しいだろうなどは、私は思います。

○加藤一億総活躍担当大臣 別に1歳年をとったからって、何か変わったわけではないですもんね。

○清水氏 もうノウハウもいっぱい持っていますから。私は常に、墓場まで持っていくなよとは言っています。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。

○清水氏 ありがとうございます。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございました。それでは次に、保育教諭として勤務をされていらっしゃいます、三角 あいさん、お願いいたします。

○三角氏 私は茨木市にあります、社会福祉法人つつみ会たんぽぽ学園で主幹保育教諭をしております、三角 あいです。よろしくお願いいたします。

私の勤めているたんぽぽ学園は、48年前に祖母が立ち上げた保育園です。なりたちは保育園なのですが、平成27年度に幼保連携型認定こども園へと移行いたしました。私自身は、乳児クラス、幼児クラスの担任を経て、今は事務的なことから子どもたちや保護者、職員と関わり、また地域の子育て支援事業にも携わっており、いわゆる何でも屋です。

皆さんもご存知かと思いますが、人間の知能や情緒は6歳までに90%以上形成されると言われています。乳幼児期の育ちがすべての根幹になることの重み、大切さ、その重圧、その責任感を私たち現場のものは、常日頃抱えております。

月曜日から土曜日まで、毎日、園で子どもたちと関わり、将来を担う子どもたちがどうしたら健やかに成長し、どのような経験が成長の糧になるのかなど、保育プログラムを日々考え、それを実現させるための準備を整えることが必要です。こうした中で、現場で求められているのは、週6日、11時間の職員配置です。ですが、それに対し、労基法で定められているのは週40時間の1日あたり8時間勤務です。その上で、66時間を補う職員を配置しなければなりません。新制度になって少し改善されたといっても、まだまだ国として保証されているのは最低基準の人数分、プラスアルファだけです。ここに矛盾が生じているように感じます。

保育現場で処遇改善にも目を向けていただき、年々、対応していただいていることには感謝申し上げます。ですが、特に、私立の保育園や認定こども園はとにかく、仕事が多く、休みもなかなかとることができません。自分の時間を費やしてまでこの仕事に打ち込めるほどの価値を見出せないという学生が多いのかなということを感じております。新しい職員を雇うにも、なり手が少ないというのが現状です。養成校で保育士資格を取得しても、保育現場に就職しない方がでてきています。また、結婚して出産しても続けている職員、いらっしゃるんですが、女性が大半の職場なので、どうしても結婚相手によっては遠い地へ行ってしまうということもあるので、経験を積んでようやく育ってきたころに離職ということになってしまっています。行政では、乳幼児期の育ちがどれだけ重要であるかということ、あまり評価されていないのではないかなというふうに感じてしまいます。その上で、保育士が誇りある職業で、子どもたちとともに充実した日々を過ごし、ともに達成感を味わえることがどれだけ無償の喜びかということも、学生の皆さんに知ってもらいたいです。大臣におかれましては、どうか、今の子どもたちの健全な育成と、保育士のやりがいのある職場作りに今一層のお力添えをお願いいたします。以上です。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございます。次に、介護の仕事を目指して専門学校で勉強してらっしゃいます、財前 唱子さん、お願いいたしま

す。

○財前氏 はい。大阪保健福祉専門学校からまいりました、財前 唱子です。よろしく申し上げます。

まず始めに、私がなんで介護福祉士になろうと思ったかというきっかけを話させていただきます。私は、違う夢があったので、最初は本当に全然介護の仕事に興味がなくて、でも高校2年生のときに、同居していた祖母が亡くなったのですが、それをきっかけに介護福祉士になろうと決めました。で、今日は、そのきっかけとなった祖母の命日で、そんな日にこのような貴重な機会に参加できていることをうれしく思っています。

高校卒業後に、すぐに専門学校に入学したのですが、この2年間で学んできて、一番印象に残っているのが、去年の11月11日の介護の日にイベントを行ったことです。そのイベントは、大阪保健福祉専門学校の学生が中心となって、地域の方や卒業生、介護業界の方に向けて、介護の魅力をもっと知っていただくとか、介護の仕事に就いて誇りに思ってもらおうということを目的として行いました。その中でも、私は夢を叶えるプロジェクトというプロジェクトに参加させていただいたのですが、そのプロジェクトってというのが、介護施設に暮らされている利用者さんに夢を聞きにいて、その夢を私たちが叶えるというプロジェクトです。今回は、お家にお土産を持って帰りたいという夢と、昔、よく登った山に登って、おにぎりを食べてヤッホーと叫びたいという夢を2つ叶えることができました。その夢を叶えるためには、私たち学生だけではできなくて、先生や施設の方やご家族さんの協力が不可欠でした。その夢を叶えて、利用者さんの感想を施設の方がビデオに撮ってくださっていたのですが、それを後日見て、その動画の中で利用者さんが、学生さんたちが、私の気持ちを大切にしてくれたことが一番うれしかったということをおっしゃっていて、その動画を何回見ても私は胸が熱くなるのですが、その2つの夢は私たちにとっては、本当に普段、当たり前に行えることで、でも利用者さんからしたら、それが一つの大きな夢で、こんなに喜んでいただけるのだということにすごくうれしく思って、今後の原動力にもなると感じました。

介護の仕事は、きつい、汚い、給料が安いという3Kで大変やねってよく言われるのですが、それが私たちはすごく悔しくて、介護の仕事は食事や入浴、排泄の身の回りのことをさせていただきだけでなく、それももちろん大切なのですが、それ以外にも利用者さんの気持ちを大切に、夢を叶えられる仕事だということを私たちは思っています。夢を叶えるためにも、自分で行動していきたいと思えます。それを皆さんで支えていただいたらと思います。ありがとうございました。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございました。次に、介護施設で勤

務をされていらっしゃる、福井 幸枝さん、お願いいたします。

○福井氏 皆さん、こんにちは。私は鳥取県米子市にあり、介護老人福祉施設よなご幸朋苑よりやってまいりました。介護福祉士として勤務してきて16年になります。この16年間に介護の現場は大きな変化を遂げてきました。以前は、集団ケアを行っていましたが、現在は一人一人の生活スタイルや好みを伺いながら、その方らしい生活を個別に提供できるよう、ユニットケアという方法を用いて、日々のケアに当たっています。

その方のことをよく知るために、もっとも重要なことは、小さなことでも気づくことです。そしてその気づきを、みなで共有することです。よなご幸朋苑では、共有ツールの一つとして、ICTを活用してきました。このことによって、ケアの質が上がり、ケアの効率化が図れ、生産性も上がっています。

今、世間では介護の仕事に対して、良いイメージがないのではないかなと感じています。介護の仕事は、楽しい、ご利用者も介助者もお互いが元気になれる仕事という良いイメージになればいいと思っています。

そのためにも、介護士の処遇改善も大きな鍵になると思います。現在の介護報酬の制度では、処遇改善につながっていきません。また、実際の現場の実情に即しているものであるかどうか、疑問に感じることもあります。当施設は、介護老人福祉施設という種類の施設ですが、ご利用者が少しでも元気になっていただけるよう、日々、様々な工夫を凝らし、ケアを提供させていただいています。中には、状態の改善が見られ、要介護度が良くなる方もあります。しかし、要介護度の重度によって報酬が決まる、今の制度では、頑張れば頑張るほど、収入が減っていくという矛盾があります。次回の改定ではこのような矛盾が改善されることを願っています。以上で終わります。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございます。それではここで意見交換をさせていただきます。加藤大臣、お願いします。

○加藤一億総活躍担当大臣 三角さん、今、保育園それから認定こども園。今はもう認定こども園ですね。中でやっていただいて、ありがとうございます。お話がありましたように、本当に、子どもさんのまさに小さい時期の教育養育に携わるといえるのは、大変重要な仕事でありますから、それに相応する評価というのはやはり処遇ということだと思っています。そういったことにもしっかりと、このプランで具体的な道筋を示していきたいと思っています。その上で、お話の中で、保育園で5年、6年経験を積んで、結婚をされて、中にはご主人の都合、あるいは子育ての都合でどうしてもお辞めにならざるを得ない方って、結構いらっしゃるように聞くのですね。例えば、今、先ほどのお話のように、短時間で働くとかですね、いろんなバリエーションを入れると、少しそ

ういう方々も働き続けてっていうことがあるのではないかと思うのですが、その辺はいかがなのですか。あるいは、それをするにしても、今、制度がこうだから使いにくいってことがあれば、是非、ご指摘いただきたいのですが。

○三角氏 ちょっとまあ、制度とかなると難しいのですが、私の幼保連携型認定こども園は、正規の先生もいますし、短時間の先生もいます。で、いろんな雇用形態というのもあるのですけれども、やっぱり、正職ということで、担任を持って、毎日子どもたちと一緒に過ごすということになると、人数がいるのですね。で、あのずっと一緒に関わって担任でということをするのはやっぱり、正職でということになってくるので。で、まあ、そうですね。元気な若い保育士さんが、子どもたちと元気に走り回ってってという人たちが多い中なので、是非、続けていくにも、やっぱりその処遇のあたりが、改善していただけたらなど、今もしていただいているのですけれども、より一層という形にはなってくるかなと思います。

○加藤一億総活躍担当大臣 そうですか。また、結婚され、子どもさんをご本人も育てながら、少しでも保育士の仕事も続けられる、そういった環境をしっかりと。

○三角氏 そうですね。うちの場合は、我が子と一緒に来ているという職員もおりますので、そういうところもどんどん増えて。で、我が子も保育園に入るのは、特別扱いはしてもらえないので、そこら辺も、ご理解をいただければと思います。

○加藤一億総活躍担当大臣 はい。ありがとうございます。今、財前さん、まさにこれから介護福祉施設に内定して、そして今、学生時代にも本当にご自身の誇りと言いますかね、そうした介護をされている方々の夢を叶えていくという、より高い仕事にこれから取り組んでいかれるというところ。よく介護の仕事、福井さんからもお話ありましたけれども、イメージがちょっと3Kみたいなというのが定着している。いや、そうじゃないのだという声はいろんな会場でも聞かせていただきました。ちょうど今日が命日になっているおばあさまの死亡をきっかけにということなのですが、どういうことが、これまでの夢から福祉の世界に、介護の世界に挑戦しようということにつながったのでしょうか。

○財前氏 最初は、子どもの頃からずっと盲導犬訓練士になりたくて、で、介護の仕事は全く興味がなかったのですけれども、おじいちゃんおばあちゃん子だったので、おばあちゃんがすごく好きで、で、同居していて高校2年生のときに亡くなって、でも私は何もできなくて、自分の無力さがすごく悔しくて、

考えたときに、おじいちゃんおばあちゃんともっと関わられるような仕事がしたいと思って、介護福祉士を選びました。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。また、あの、福井さんからも処遇の改善の話がありました。あの、今、処遇の加算とか、という制度も新たに取り入れてはいるのですけれども、現場の実情に即していないのではないかというご指摘がございました。もう少し具体的にお話をいただけますか。

○福井氏 処遇改善加算で加算に、処遇を改善すれば加算がつくという制度になっていますけれども、それ以外のものが、ちょっとマイナス裁定というかになっているので、なかなかそこを算出していける施設も少なくなっているのではないかなということで、なかなかその部分でどうやって財源を出してくるのかというところが、うまくいかない施設が多いのではないかなというふうに感じるので、やっぱりそのあたりをしっかりと、本当に実情に合っているのかどうかというところを、もう一回見直していただけたらいいかなと思っています。

○加藤一億総活躍担当大臣 処遇改善加算を利用する前の条件がなかなか整わないというところなのですかね。

○福井氏 ですね。あと、ほかの加算に関しても、加算を取れる施設もあれば、そこまで人員が足りないから加算もつけられないというところもたくさんあると思うのです。やっぱり、そういうところにとっては、すごく厳しい現状があるのではないかなというふうに感じているので、その辺を見直していただけたらいいかなと思います。

○加藤一億総活躍担当大臣 ありがとうございます。また、介護の現場で本当にみなさん方がケアすることによって、介護の状態というか、状態がよくなっていくということが本当によくあるのですね。ただそれが今言った、介護報酬上、マイナスになるというご指摘、ほかのところからもいただいていますので、それをどういう形で、その努力をどんな形で反映していけるか、しっかり考えていきたいと思っています。

○福井氏 ありがとうございます。

○田中一億総活躍推進室次長 ありがとうございます。それでは、登壇者の皆さまとの意見交換はここまでとさせていただきます。登壇者の皆さま、大変ありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。ご登壇の方々にお話をお伺いしてまいりました。ではここからは、お時間に制限がございますが、せっかくの機会ですので、会場の何名かの方に、ご意見を伺ってまいります。お一方、1分以内で、簡潔にお願いいたします。手を挙げていただきましたら、こちらから指名をさせていただきます。スタッフがマイクをお持ちいたしますので、通路まで恐れ入りますが出ていただきまして、最初にお名前からお願いをいたします。それでは、大きく手を挙げていただきまして。

それでは、ステージ向かって右手側の真ん中の、はい。よろしく願いいたします。通路に出ていただきまして、お名前から恐れ入りますが、お願いいたします。

○質問者1 イグチと申します。みなさん、今日は貴重なお話、ありがとうございました。私も一社やめまして、今、二社目でもう27年やっているんですけども、最近の若い方ですね。企業に入られてすぐ退社されるケースが非常に多いのですね。何のために就職したのと、こう私、人事やっているものですから、聞くのですけれども、なんとなくという答えが非常に多いのですね。さっき、大学生の方がオーストラリアで語学を勉強されていると。それで、総合商社にというお話がありましたけれども、そういう夢を持っておられる方が非常に少ないと思うのですね。やっぱりここを。

○司会 そろそろおまとめください。

○質問者1 はい。そのところを、加藤大臣のところと、文部科学大臣・馳さんのところですね、やっぱり共同でちょっと作業をして今後の人材育成にやっていただきたいというふうに思っています。ありがとうございました。

○司会 イグチさん、ありがとうございます。では、続いての方、挙手をお願いいたします。では、はい。緑のセーターを着ていらっしゃる方。マイクをお持ちいたします。よろしく願いいたします。

○質問者2 本日はどうもありがとうございました。大阪で介護の事業と、そして介護福祉士の養成校で講師の方をさせていただいています。先ほど、財前さんのお話をお聞きしまして、こんな熱い職員さんが現場に増えていけばうれしいなと思って、本当に感動いたしました。で、私はこういった介護の楽しさとかですね、やりがいとかですね、そういったものを、現場が非常に失っていますので、そういったものを企業さんの方について、なんていうのですかね。研修をして、年間150本ぐらいさせてもらっているものなのですが、今、ご指摘がありましたように、やればやるほど、報酬が失われる仕組みというところが

非常に矛盾を感じるころではあります。ですので、何かしらやはりおいしいパンを作ったらたくさん売れて、たくさん繁盛すると一緒に、おいしいフルーツができたら愛情を注いだ分だけたくさん売れて。

○司会 そろそろおまとめください。

○質問者2 なるように、はい。報われる仕組みっていいのですかね、理想を持って社会に出た人たちが、本当に自分たちが胸を張れるような、そういった動機付けの仕組みを、大臣、考えていただければ非常にありがたいなと、そういうふうには考えています。どうぞ、よろしく願いいたします。

○司会 ありがとうございます。では、続いての方、大きく手をお挙げください。お願いいたします。それでは、茶色のお洋服を着ていらっしゃいます。今、手を挙げていただいております方。どうぞ、通路に出ていらっしゃいます、お名前をお願いいたします。

○質問者3 コニシと申します。今、リハビリテーションの仕事をしています。やっぱり気になるのは障害の持っている方の、社会参加というところなのですが、けれども、やはりリハビリテーションをしていますと、治療にも期間があって、限界がある。コスト的にもやはり限界がある。で、在宅に戻ったとしても家族にも負担がある。本人にも負担がかかるということで、本当にそれが社会に活躍できるような環境ができるのかというところが、とても気にはなっています。ので、ソフト面もハード面も根本的に変えていくような、そういう活躍というか、そういう提言をしていただけることを大臣にお願いしたいと思います。以上です。

○司会 コニシさん、ありがとうございます。では、お時間の都合上、最後の方とさせていただきます。どうぞ、女性の方で。では、前で手を挙げていただいている方。マイクをお持ちいたします。それではよろしく願いいたします。

○質問者4 ネモトと申します。今日は貴重な時間をありがとうございました。私はこちらの登壇者にはいらっしゃらないタイプでして、非正規で働いているシングル女性になります。ワンキャリアで、キャリアアップを支援する先であったり、ママの再就職支援というのはすごくたくさんある中で、今、非正規で働いている、世帯主になっている女性というのも多くいるのが実情だと思います。先日、横浜市と大阪市の男女共同参画部門が、初めて非正規シングル女性の人数調査というのを行ってくださいました。是非、その方たちに対しても光

を当てて、活躍の場を。転職歴も多いかもしれませんが、いろんな事情を抱えて、長く非正規で働いている方もいらっしゃいますが、能力の高い方たくさんいらっしゃいますので、そういった方たちがもう一度、社会に戻れるような道筋を作っていただけたらなと思っています。お願いします。

○司会 ありがとうございます。貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。皆さまのご意見は、今後の参考とさせていただきますので、熱い思いをアンケート用紙にご記入いただきまして、お帰りの際にご提出をお願いいたします。それでは、加藤大臣、会場から上がったご意見に対して、お答えいただける範囲内でよろしく願いいたします。

○加藤一億総活躍担当大臣 最初にイグチさんから、すぐに若い方が辞めてしまわれるというお話、先ほどからのお話もありましたけれども、やはり高校時代、あるいは大学時代、自分は何をするのだ。夢や目標をしっかりと持って、そしてそれに向けて勉強し、あるいは就職をしていく。そのことが非常に大事だというご指摘ありました。まさに、よく職業教育という言い方もあるようでございますけれども、そういった形のものもしっかりやっていける。これは、今、文科省は色々と議論をされていると思います。やっぱり、一番、スタートのところを、夢をどう持つか。夢がなければ、この先ほど、それを実現に向けてということもスタートしないわけですから、しっかり取り組ませていただきたいというふうに思います。

それから今、介護の事業、そして福祉士の養成をされているお話がありました。先ほどもちょっと申し上げましたけれども、要介護者の方々の状態がよくなっていく。また、そのために皆さん、努力をしていただいている部分もあるわけでありまして。それを報酬上、どう上乘せをしていくのか。この仕組みについては、これからしっかり議論をさせていただいて、取り組みをしていきたいというふうに思っております。

それから、リハビリの方、コニシさんからお話をいただきました。障害を持つ方、今日もお話をさせていただきましたけれども、様々なサポートがやはり必要であります。それから、定着していくためにも必要でもあります。そういった意味でも、障害者の例えば就労促進をしていくということについても、国民会議でしっかり議論をさせていただいて、このプランの中に盛り込ませていただきたいなというふうに思います。

それから最後に、非正規で頑張っておられるという、また、シングルマザーとして頑張っておられるというお話がありました。ニーズ調査、ちょっと私まだ見ていないので、それもしっかり見させていただきたいと思いますが、やはり非正規の方が正規で働いていけるように、あるいはそういう方々が様々な、例えば新たな仕事に就こうとする時に、先ほどもありましたけれども、職

業能力開発と言いますか、いろいろな学校に行くとかそういったことも必要になってまいります。しかし、その時の生活をどうするかということもあるというふうに思っております。その辺も含めて、そうしたひとり親の家庭の方々が、その子どもさんをしっかりケアをしながら、そしてよりその方のキャリアアップもしていただける、こういった政策をしっかりと進めていきたいなと思っております。どうもありがとうございました。

またあの、多くの会場の方々がお手を挙げていただきました。すべてのお話をお聞きできませんでしたが、アンケートをお配りさせていただいております。そのことはしっかり我々も受け止めて、また国民会議での議論にもつなげていきたいなというふうに思っております。今日はこういう機会をいただきまして、本当にありがとうございました。

○司会　ありがとうございました。

○司会　加藤大臣、それでは最後に、本日の対話全体を通してのお言葉をどうぞ、よろしくお願いいたします。

○加藤一億総活躍担当大臣　ありがとうございました。今日は多岐に渡ってご議論をいただきました。まず就職をこれから頑張る方々、あるいは再就職ということで新たなチャレンジをされていくというお話をいただきました。それから、ある意味では広い意味で働き方改革ということで、それぞれパートから入り準社員、社員になっていかれる、あるいは短期で働きながら管理職として短時間勤務をしながら働いておられる、そして、さらには長時間勤務等をいかに縮減していくのか、あるいは女性として起業されていく、そして、障害、あるいは高齢の中で頑張っておられる、そして介護福祉の現場における仕事をされている方々から、それぞれ貴重なお話をいただきました。

一つ一つは議論の中で出てきておりますから、改めて繰り返しません、今日いただきましたお話、それから会場のみなさんとのやりとり、そして、お書きいただいているアンケートの中身、これをこれからまた国民会議の場でもしっかり議論をさせていただき、そして春にはニッポン一億総活躍プラン、これを作らせていただこうと思っております。

ただ、プランを作ればものができるわけではありません。やはりプランを作り、そして同時に一つ一つのことを実行していく。そして、政府がやるだけものが動くわけでもありません。会場のみなさん、そして今日、登壇していただいた皆さんと一緒に、そういう社会の実現に向けて一緒にやっていきたいと、こう思っております。どうぞよろしくお願いいたします。今日はありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。それでは、加藤大臣、皆さまにご降壇いただきます。どうぞ、大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございます。

○司会 会場の皆さま、まだお立ちにならず、ご着席のまま、お待ちくださいませ。

さて、皆さま、いかがでしたでしょうか。本日の模様は、後日、ポータルサイト「政府広報オンライン」に動画が掲出されますので、是非、ご覧いただきたいと存じます。また、アンケートは、受付、またはスタッフへお渡しくださいませ。今後の参考とさせていただきますので、ご協力をお願いいたします。

(以上)